

[計画書]

[報告書]

研究会の名称	リスク比較研究会	平成 23 年度(2011)
題目		先ず放射線医学総合研究所や国立感染症研究所の立場からのリスク、化学企業の立場からの化学物質リスク、安全学の立場からのリスクなどについて各分野の専門家の話を聞いて情報整理を行った。
参加者 (座長◎ 副座長○)	◎増田優 横山泰一、高橋俊彦、石井聡子、結城命夫	そのうえで研究会メンバーで化学物質によるリスクと放射線によるリスクについて比較検討して「発がんの生涯リスクのまとめ表」の作成を試みた。 2012年3月の春季討論集会で紹介しつつ討論を行った。討論の結果としては、許容リスクをどの程度に決定するかは多くの議論があるが、日本では海外のリスクレベルを分野ごとに取り入れているに過ぎないことが指摘された。また分野によって同じ発がん性でも基準に差があることが見出された。
研究開始年月及び研究終了予定年月	平成 23 年 7 月 ~ 平成 25 年 3 月	企画運営委員会受理 平成 年 月 日
研究の目的	放射線、化学物質、機械・設備、消費生活用製品、医薬品・食品、病原菌の各分野におけるリスクの想定や安全度の認識について相対的に比較し、議論を行う。	平成 24 年度(2012) 前年度の議論を更に深めた。機械システム分野、消費生活用製品分野、食品分野、遺伝子組み換え分野、放射線分野、化学物質分野、ウイルス感染症分野、労働安全衛生分野など検討対象を大幅に拡大するとともに短期的なリスクから発がん等の長期的なリスクまで幅広く取り上げて比較する討論の場の設定に取り組んだ。
研究計画の内容	2011年3月11日の東日本大震災によって起きた東京電力福島第一原子力発電所事故は、事故原因、対応の的確性、背景やそもそもの前提認識などについて多くの議論を巻き起こした。加えて、大量の放射性物質の漏出は「人の健康影響に対して懸念あり」、「直ちに健康に影響はない」の議論が繰り返されている。これらの議論を耳にするにつけ放射線のリスクをこの程度のこととして捉えて進めるのであれば、化学物質のリスクを考える分野をはじめ、他の分野のリスク懸念は比較においてどう理解すべきなのだろうか。 本研究会は化学物質と放射線の対比にとどまらず、分野の違いを越えて機械・設備、消費生活用製品、医薬品・食品、病原菌の各分野におけるリスクの想定や安全度の認識について相対的に比較検証し、議論を行うことを目的とする。 当然のことながら、他の立場のリスク想定を緩和しても良いと言う見解を誘導する意図ではないし、放射線防護に携わっている多くの方々を非難するために行う議論ではない。放射線防護に携わっている方々の意見も聞きながら、あらゆるリスクに対して正しく怖がり、バランスよくリスクを管理することを学ぶために行う。	2013年3月の討論集会で集約する形になったが、欧米や国際機関では分野を超えた統一的基準が示されるのに対して、日本は許容リスクの認識に分野ごとに差があること、分野によって同じ発がん性でも基準に差があることなどが見出された。また、放射線分野の認識や基準が他分野と比べて乖離していることが示唆された。 平成 年度 分野間の相対的比較を行うとした研究会の当初目的は果たしたし、問題提起もできたので本研究会は予定とおり2013年3月をもって終了とした。
受理番号	企画運営委員会 受理 平成 年 月 日	企画運営委員会受理 平成 年 月 日